

第一章

大いなる仕掛人

近鉄名古屋線の特急電車が、あっという間に千代崎ちよだきを通過し、次の停車駅白子しろこへむかって走っている。車内の冷房が快よい。

進行方向左手には、ところどころ遠くに松林が見える。おそらく浜沿いに点在しているのだろう。千代崎・白子は海水浴場としても有名であると聞いた。人文社刊『三重県郷土資料事典』には、このあたり、「白砂青松の美しい海岸線がつづく」とある。

特急電車が、白子駅についた。ホームへ降りたとたん、七月、八月と記録破りの「真夏日」がつづいている。東京と少しも変わらない熱風が、待ちかまえていたように襲ってきた。

今年の猛暑は、この伊勢地方も例外ではないらしい。改札口を出ると、タクシートのりばがまた混んでいた。三分、五分。ひどいときは十分以上も間隔があく。炎

天下で待つこと三十分余り、やっと順番がきて乗り込んだ。

「鈴鹿医療科学技術大学（現・鈴鹿医療科学大学）」

わたしは行先を告げた。

最寄駅は千代崎だが、でも、「千代崎には特急電車が停らないので、一つ先の白子で降り、タクシーで来てください」と教えられていたのである。

走り出してから、

「わかりますね、鈴鹿医療科学技術大学」

もういちど念を押した。

来年四月に開校予定の新設大学だから、まだ地元でも知らない人が多いのではと案じたのだが、

「ええ、わかっています。今、大きいのを建てるところでしょう？」

「そうです」

「スゴイ建物ですよね」

運転手は、近頃そこへ客を運ぶことが多くなりましたと、ときどき外国の人も見えられますよ、と機嫌よくいつてから、

「どついう大学なんですか」

とあべこべに質問してきたが、まだ、わたしも詳しくは知らない。

「日本放射線技師会という組織がありますね。そこで放射線技師の育成と生涯教育をめざして建てる、わが国で初の四年制大学と、その附属機関らしいですよ」

急に話がむずかしくなったせいか、運転手は黙ってしまった。

かつては穀倉地帯であった伊勢平野の中心部。その海寄りの国道23号線を、タクシーは北へむかっているらしい。ひと駅だけ戻るにはずいぶん走るのだな、と思っていると、いきなり右折した。年配者にしてはけっこう乱暴な運転だ。

国道からそれると、そこは見渡す限りの田園風景。と、錯覚させるほど緑にあふれていた。もちろん、その中に住宅地区もあるが、穀倉地帯だった名残りをまだたっぷりととどめている。

フロントガラスの彼方に特急電車の中から眺めた海岸の松林が見えてきた。

「あそこです」
運転手が指さした。

田んぼの中にこつ然と現われた宇宙基地の建設現場。といつては少々おおげさに過ぎるけれど、運転手の教えてくれたそれが、明らかに工場やスパー、今はやりのマンションなどは違った建造物であることだけは、まだ工事半ばのその姿を見ただけでも容易に理解できる。

わたしはふと数年前、やはり工事半ばの東京両国の新国技館を取材したときのことを思い出した。ちょうど敷地の広さ、建物の高さなどが似ているのだ。いや、『鈴鹿』のほつが、敷地はずっと広いかもしれない。高さも地上部分だけなら『鈴鹿』のほつが、倍はあるだろう。しかし、遠く鈴鹿の山脈をのぞむ、伊勢平野の一角というロケーションの中で見ると、来年一月の完成を待つまでもなく、この建物が四辺に偉容を誇る

というよりも、恵まれた自然環境との調和をどこまでも考えてゆく容器いれものになるのであることは、素人目にもよくわかった。

「この辺りでいいですか」

運転手がスピードを緩めながら訊いた。

見るとそこは『鈴鹿医療科学技術大学』のキャンパスが完成すれば、たぶん正門となるべき所なのだろう。テニスコートなら五面ほどとれそうな広場になっていて、もちろん、まだ門も塀もないけれど、その広場の中央には樹齢八十年ほどの楠が、明らかに他所から移植されたとわかる状態のまま据えられていた。開校すればさしあたり『鈴鹿』のシンボルとなるべく待機させられているのだらう。

「いえ、ここではなくて、教育センターのほうにつけてほしいんですが」

「ああ、あつちですか」

運転手は勝手知ったぶうにハンドルを切り直すと、ふたたび車をゆっくりと走らせた。といって、『教育センター』は同じ敷地内に隣接してあるらしく、すぐにモトクロスのコースのような、廃棄した土の山に夏草が生えている道なき道へと車を乗り入れて行った。一般道路からのアプローチがまだ出来上がっていないのだ。いったい、『教育センター』の建物を、どのように形容したらいいのだらうか。『社団法人日本放射線技師会』とか、『WHO国際放射線技師研修センター』とか書いてあるプレートの文字から受ける、お堅い印象とはずいぶんちがっていることは、だれの目にもわかるはずである。

いかめしくもなければ野暮でもなく、都会のホテルほど人間臭くはないけれど、各地にあるNTTの建物ほ

大いなる仕掛人

ど無愛想ではない。民法のローカルテレビ局、それによく似た雰囲気といってしまえば簡単だが、もちろん、これも正確ではない。といって最近ブームの地方美術館ほど豪華すぎてもいない。でも、そのいずれともどこか相通するところがある。そんなフシギな建物を思い描いていただければよいだろうか。

まず、玄関を入るとき、前面いっぱいには張られたガラスが、巨大な鏡の役割をしていることに初めての訪問者はおどろかされ、思わず自分の歩く姿勢を正してしまうちにちがいない。

そして広々としたスペースのロビーは、中央にレントゲン博士の胸像が飾ってあるせいか、その簡素なたたずまいとあいまって、美術館のそれを思わせる。

そのほか一階には共用部門としてラウンジ、レストラン、ティーラウンジ、和室（3室）など。管理部門として事務室、フロント、センター長室、応接室など。実習部門としてR I実習室、C R室、X線室（A・B）、C T室、リニアック、工作室など。

二階には研修部門として大講室（同時通訳設備）、会議室、講義室（A・B）、コンピューター室、図書室、講師室（A・B・C）、印刷室、研修者用ラウンジなど。宿泊部門としてシングルルーム（20室）、ダイニングキッチン、自販機コーナーなど。

三階、四階には宿泊部門としてツインルーム（23室）、ランドリー、自販機コーナー、宿泊者用ラウンジなど。

ついでにいえば、屋上からの眺めもまたすばらしいのである。わたしがのぼった日は薄曇りの天気ではあったが、それでも千代崎海岸の松林のむこうには伊勢湾。さらにその彼方には知多半島の島影がうっすらとよこたわり、背後をふりむけば鈴鹿山脈が、たおやかな起伏を連ねて肥沃な平野を抱きかかえている姿が一望でき

るのだった。

平成三年四月の開校をめざしている、『鈴鹿医療科学技術大学』の「本部・管理棟」、「厚生・研究棟」、「実験・実習棟」、「図書館棟」、「講義棟」、「体育館棟」よりひと足先に完成したこの『教育センター』は、平成元年十月にオープンして以来、はやくも会員たちの活発な研修・交流の場になってきているという。『日本放射線技師会』の会員ばかりではなく、世界各国からの研修者・視察団の来訪もしきりと聞いた。

さらにこれから『WHO国際放射線技師研修センター』として、主にアジアにおける医療技術向上のため、アジア各国から年間数十人の研修生を受け入れ、彼らに先端の医療技術を習得してもらう、その態勢もすつかり整っているという。

この『教育センター』の誕生だけでも、わたしには目をみはるような驚異である。わたし自身、『日本放送作家組合』という組織に所属しているため、このような事業を遂行することの困難のほどが、それなりに理解できるからだ。一職能団体がこれほどの建物をつくるということは、実際に身をもって経験した者でなければ、ほんとうのところは誰もわからないのだからうけれど、実に至難のわざなのではあるまいか。

もう二十年近くも東京六本木の裏通りにある、小さなビルの一階と二階の一部を、事務局と教室のために借りつづけている『日本放送作家組合』も、かつては自前のビルを持つことに意欲を燃やした時期があった。

いくつかの物件が検討され、最終的には山手線目黒駅近くにある、新築ビルの一・二階（二・三階だったかもしれない）を買い取る案にしばらく、理事会でもカンカンガクガクの討論がつづいた。

しかし、けっきょくは時期尚早、それだけの借金（たしか二億円ぐらいだったと思う）を、返していくだけの自信が持てないということでご破算になってしまった。反対が圧倒的多数だった。わたしもその一人であっ

大いなる仕掛人

た。

それからもう十年は経つたろうか。『日本放送作家組合』は、いまも六本木の裏通りの、もうすっかり古ぼけてしまった小さな貸ビルから身動きできないままでいる。あのとき決断できなかった（反対しつづけた）自分を思い出すと、『日本放射線技師会』の建てた殿堂、『教育センター』を目のあたりにして、わたしは過去の不明を悔いてかすかな胸の痛みすら覚えるのである。わたしが賛成に回っても大勢は変らなかつただろうけれど。

それにしても、なぜ『日本放送作家組合』にはできなかったものが、『日本放射線技師会』にはできたのだろうか。もちろん、会員数の違いはある。会員数一〇〇〇人そこその前者と、会員数およそ二万五〇〇〇人の後者をくらべて同一に論ずることは無茶であろう。だが、両者の間の歴然たる今日の差が、会員数のちがいでだけによるものではないように、わたしには思われるのだ。その差異がなにの違いによるものなのか、それを見極めてみたい。そこにもしも「謎」があるならば、その「謎」を解き明かしてみたい。かりに「秘術」のよくなものがあるならば、ぜひ教わりたい。そのことに意欲を感じはじめたのが、そもそも今回わたしが『鈴鹿』を取材することになったきっかけであった。

なにしろ、『日本放射線技師会』という、一般にその名前を知る人すら決して多くはない一職能団体が、会員たちの生涯教育を目指し、また同時にWHO（世界保健機構）の研修センターとしての機能を持つ、グローバルな教育・研究・交流の場となる『教育センター』を、独自に建てたことすら驚異といおうか、奇蹟とさえ思われるのに、さらに四年制の理工系大学まで創ってしまうのである。「科学技術の進歩を真に人類の福祉と健康の向上に役立たせる」という建学の精神を掲げて。

それも総工費七十三億円。もちろん、三重県からは大学のための補助金（県内の大学に対する従来の倍額）、鈴鹿市からは敷地提供とプラス十三億円の補助金。そのほか東芝、日立、島津製作所、フジフィルム、コニカなど医療機器メーカー三十数社から、機器提供のかたちで二十七億円という強力なバックアップがあったとしても、銀行からは一円の借金もせず、あとはすべて『日本放射線技師会』の自己資金によって賄ってしまったのである。これは奇蹟をとり越し、もはや魔法の領域であるとしたか、わたしには思えない。

それにしてもである。いったいなぜ、これほどまでに破天荒なことが実現できたのだろうか。それがまず不思議でならない。『日本放射線技師会』なる組織の質の高さは、もちろんいえるだろう。放射線技師の九十五パーセント以上が加入しているという組織率の良さからもそれはうかがえる。だが、どんな組織でも似たようなものらしいが、熱心に協力してくれる会員は、せいぜい全体の二割。不平不満分子が一割。あとの八割はとくに協力的でもなければ、とくに批判的でもない、執行部の敷いたレールになんとなく乗って、大勢に順応してゆく会員たちである。

もちろん、これは一般論であって、『日本放射線技師会』にもそのままこの比率が当てはまるものかどうか、わたしにはわからないが、いずれにせよ、一事を成すにはかならず、その原動力となるものが必要なはずである。発案者、起草者、発起人、くだいていえば仕掛人のことだ。

その仕掛人が、まず自らの理念とアイデアを披瀝しつつ同志を募り、さらに執行部内の意志を統一した上で、こんどはその意志を情熱をこめて会員全体へと波及させてゆく。これがたぶん一般的な図式であろう。だが、これは口や筆でいうほど簡単なことではない。

しかし、『日本放射線技師会』は、見事にこの難関を克服し、一職能団体としては前代未聞の『鈴鹿医療科

学技術大学』を、その創立にまでいままさに漕ぎつけようとしているのだった。誰の意志でもない、全会員が自分たちの意志で創ったのだと胸を張っていえる四年制大学が、来春四月には開校するのだ。

仕掛人の胸中やおもつべしである。わたしの今回の取材旅行は、その仕掛人に会って、大学設立までの経過をくわしく訊くのが第一の目的である。その仕掛人の名は 日本放射線技師会会長・医学博士・中村實。

「いのち」への助走

「申し訳ありません。中村会長からいま不意の来客があつて、お約束の時間を三十分遅らせていただけないでしょうか、というおねがいなんです。」

二階のシングルルームに手荷物を置き、頃合いを見はからってロビーへ降りていったわたしの姿を見かける、フロント係の青年が急ぎ歩み寄ってきて丁重な物腰でいった。

「わかりました」

わたしは会長への質問事項を、もういちど念入りに検討できる時間が与えられたのを喜んだ。
すると、

「それで会長から、お待ちねがうあいだに、これを観ておいていただくようにと言付けなんです。」「
そういつて手にしていた家庭用のビデオテープを見せた。」

「なんででしょうか？」